雷の皇帝

もちゃもちゃの玉ねぎ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日本に誕生したカンピオーネ『白峰深夜』他のカンピオーネと同じく自由奔放で自分勝手な彼は気の向くまま世界に混沌を振りまく

目次

剣王激突 ―― 1
後日談 ―― 6

剣王激突

雷が降り注ぎ、炎が荒れ狂う。刹那のうちに竜巻が生まれ刹那のうちに銀閃によって切り裂かれる。向き合う剣と槍、剣の一閃で山は割れ、槍の一突きで大地は抉れる。既に元々は広大な森林であった場所は草木ひとつ残らない焼け野原と化していた。

誰が信じられるだろうか、この神話の再現のような天変地異を引き起こしているのはたった2人の青年だと、、、

「ははは！楽しいなドニ!!」

そう笑っている白髪の美青年の名は白峰深夜。日本初の神殺しであり『雷皇』と呼ばれる若き青年王である。

「そうだね深夜!!やっぱり君との戦いは心が踊る!!さぁ、もっと僕を楽しませてくれ!!」

その深夜と剣を交えている金髪の美青年はサルバトーレ・ドニ。イタリアの神殺しで『剣王』と呼ばれている。

……　その者達は、覇者である。天上の神々を殺戮し、神を神たらしめる、至高の力を奪い取るが故に。

その者達は王者である。神より簒奪した権能を振りかざし、地上の何人とからも支配されえないが故に。

その者達は魔王である。地上に生きる全ての人類が、彼等に抗う程の力を、所持出来ないが故に。その者達は、カンピオーネである。

そうこうしているうちにも2人の闘争は続く

天より墜ちる雷霆。地表を燃やす地獄の業火。大地を裂く銀の魔腕。これがたった2人の青年により引き起こされているなどにわかには信じられない。

白は雷を、炎をそして槍を操る万能だとすれば、金は剣、それただ一つに特化した2つの最強。その2つが衝突した結果、草木は焼け落ち、湖は蒸発し、山は真っ二つに割れ、大地の至る所に裂け目ができた。

常人が見れば目を疑い、恐怖し、地獄とはここであると錯覚させるような悲惨な光景が広がっている。

「行くぞドニ!!」

そう言うと深夜は槍を構える、すると槍に雷が集まっていく。放たれる雷速の槍、それをドニは避けようとする素振りもせずに待ち構えている。そしてドニに槍が直撃する。

槍の威力で砂埃がたち、ドニの姿が消える。

「いやぁ今のは危なかった」

砂埃が消えるとそこには無傷のドニがたっていた。

「それが新しい君の権能か?」

「そうそう!僕の新しい権能だよ!誰から奪ったかは当ててみてよ!」

ドニは嬉しそうに深夜に問いかける。

「次はこっちの番だよ!!」

そういうとドニは剣を振り上げ一閃、すると深夜に向かって斬撃が地面を裂きながら向かってくる。

先程のドニと同じように深夜も避ける素振りを見せずに斬撃を待ち構えている。

斬撃が直撃する。先程と同じように砂埃がたち姿が消える。

そして砂埃が晴れたとき見えた深夜には純白の翼が生えていた。

「えっ?!なんだいそれ?!」

ドニもその姿に面食らい、困惑している

「新しい俺の権能だよ。ミカエルっていう神から簒奪した。」

ドニの問いにイタズラが成功した時の子供のような顔をして深夜が答える。

「深夜も新しい権能手に入れたのかー。羨ましいなぁ」

「なんだ?降参するか?」

ニヤニヤと笑いながら深夜がドニに言う

「まさか、戦いはこれからだよ!!」

深夜の問いを鼻で笑い戦いの続きだと剣を構える。

剣と槍が何度も交わり火花が散る。深夜が雷を放ちそれをドニが切る。
武器を使った戦いではドニに軍杯が上がる。しかしそこを深夜は雷や炎などを使い補うことで五分五分の戦いにまで持ってきている。しかしドニもその脅威の剣術を使い深夜に傷をつけている。しかしドニに傷はない。ドニが新たに手に入れたという権能による力だ。それにより深夜の攻撃は尽く阻まれている。
一旦深夜がドニから距離をとる。
「その権能厄介だな。俺も回復の権能を使おう。
《聖なる炎よ蒼き光よ我が身を癒す羽衣となれ》」
そう深夜が聖句を唱えると深夜を蒼い炎が包む。するとみるみるうちに傷が消えていった。
「うひゃーその傷作るの苦労したのにー」
ドニがあちゃーと言っているが気にしないでおこう
「君の新しい権能、わかったよ。鋼の如き屈強な肉体、討ち果たした神を考えれば間違えようもない。それはジークフリートから簒奪した権能だね？竜の血を浴び、不死身の肉体を獲得した逸話に由来するのだろう？」
少しの間会話が途切れ場が静まる
「せいかーい！よく分かったね！」
その空気を壊したのはドニだった。すごーいすごーいと自分の権能が見破られたのにも関わらず自分のことのように喜んでいる。
「でも、君にこれを突破する権能はあるのかい？」
刹那、空気が凍る。ドニと深夜は他の王達と違い友達と呼んで良いほど仲が良い。しかしだからと言って何を言っても怒らないほど彼らのプライドは低くない。今のドニの挑発は深夜のプライドを傷つけるものであった。
「……今お前、俺を下に見たのか??」
底冷えするような、地獄の主が語りかけてきたような声、常人であればその場に崩れ落ち、命乞いをする間もなく気絶してしまうような怒りを孕んだ声。

「さぁどうだろう？」
そんなことを気にする素振りも見せずにドニは薄ら笑いを浮かべる
―刹那、深夜の姿が雷の落ちるような轟音と共に消える。
それから1秒と、経たぬうちにドニが吹っ飛んだ。
比喩ではなく本当に吹っ飛んだのだ。イタリア最高の騎士と呼ばれ、恐れ、敬われている剣の王が反応する間もなく吹っ飛ばされた。
「……ハハハッハハハハハハハハ!!!!!
そう！それだよ!!初めて君に会った時にはあってさっきまでの君には無かったもの!!単純なものだったんだね！それは怒り！なんに対してでもいい！今君は僕に対して怒りを抱いている！さぁここからがれ本気の戦いだ!!」
そう言うとドニは深夜に向かって突っ走る。
「遅い!!」
深夜はまたも雷と化してドニに一瞬で近ずき蹴り飛ばす。ドニがまだ地面にぶつかる前にドニに近ずき上空に蹴り飛ばし、そして上空から地面に向かってドニをかかと落としで叩き落とした。
「良いね！すごく良いよ!!でも僕はまだ傷といった傷をおってないけどどーするの？」
あれだけの猛攻を受けたのにも関わらずドニの体には傷が1つも無かった。いや正確には傷は負ったが治癒したと言った方が良いだろう。証拠に体の至る所に溶けた金属がまた固まった痕のようなものがある。
しかし深夜がそれを知る術もなくさらに怒りを滲ませた顔に変わる。
「……良いよ。そこまで言うなら俺の最大出力見せてやる!!」
すると深夜が右手を空に掲げる。みるみるうちに空は黒く染まり、轟音が響く、やがて辺りを覆っていた雷雲らひとつの場所に固まっていく。
「死ねドニ!!《終焉の雷霆（ケラウノス）》!!」
その言葉と同時に世界の終わりを連想される極大の雷がドニを襲

う。
ドニは声を上げる間もなく雷に呑まれた。
被害はそれだけに留まらず2人が戦っていた森林地帯、周辺の山全てを消し飛ばし跡には隕石が落ちてきたようなクレーターだけが残った。
「ゴホゴホ、いや危なかった。流石に死ぬと思ったよ」
生き残っていたドニだがその体は傷だらけで腕も取れかかり至る所に血がついている。
「どーやって生き残った?あれはカンピオーネだろうが関係なく殺せる威力だった。」
ドニが生き残っているのが不思議で堪らず深夜がドニに聞く
「普通にしてたら死んでたね。だから、斬ったんだあの雷を。」
笑いながら言うドニ
「はっ?」
対して深夜は口をぽかんと開けている
「ハハハハハハハハ!!やっぱり君は面白いなドニ!」
先程までの怒りは何処へやらドニの肩を叩きながら笑う深夜。
「それでもこのダメージだからね。君の奥の手やばいね」
「どっちにしろもう呪力も尽きた。今回は引き分けだな。」
「そうだね。次は勝つよ!」

こうして2人の王が引き起こした最悪の腕試しは終わった。
2人がその場から消えた後残ったのは世界の終わりを連想されるクレーターだけだった。

後日談

「ここで速報です。ドイツ南西部に位置する山岳地帯であるシュバルツバルトに隕石が落下し、役半分の地帯が消滅、甚大な被害が予想されます。」
「うわぁ怖いなぁ」
　そんなニュースを見て怖がる少女が1人
「どうしたんだ？静花」
　そんな妹を不思議に思い声をかける少年が1人
「お兄見てよこれ。隕石だって。」
　先程のニュースを兄に見せる
「隕石ー？うわ！こりゃ酷い。こんなのが落ちて来たって考えると怖いな。」
「ほんとそーだよねー」

♦♦♦

　場所は変わって東京にあるビルのある一室
「いつもいつも言っているだろう！君は他の人間に対する迷惑を考えてくれと！」
　そう声を荒らげているのは正史編纂委員会の東京分室室長である美青年いや、女性であるが男性の格好をしている男装の麗人で名前を沙耶宮馨という。

「うんうん、わかったわかった」
「ちゃんと聞いているかい!?」
「別に良いじゃん。神が出たら殺してあげてるんだから。その為の練習だよ!うんそういうことにしよう。」
　自分で自分に言い聞かせているようだがそれでも被害が甚大すぎて笑い事にならない。
「ドイツの魔術結社から多数の抗議文が送られてきているんだ!もう対処するのは僕なんだよ!?「いややるのは私」なんだい?」
「いえなんでも、、」
　縮こまってしまった男は甘粕冬馬。馨の右腕である。
「なぁ馨、お前は俺の事嫌いなのか?」
　深夜が悲しそうな目をして馨を見る。まるで捨てられた子犬のよう
「もうその手には乗らないよ。フン!」
　そんなことを言っている馨だが少し声が上ずっているし愛くるしいくりくりした目をチラチラと見ている
「まぁもう10数回引っかかってますからねぇー」
「うるさいよ甘粕さん」
「はいすいません。」
「まぁまずまず俺は王様で君たちはその臣下だ。俺が君たちの言葉に従う必要は無いんだけどね。」
　その通りである。彼は王であり、このふたりはその王の臣下。そこにはしっかりとした身分の差がある。
「今の僕は君の友として言ってるんだ。君が魔王だとしても敵を作りすぎて良いことなんて無いよ。」
　本当に心配しているという顔で深夜に言う。
「安心しなよ馨。俺に歯向かう奴は誰だろうと殺してやる。俺が気に入った奴に手を出したヤツも殺す。もちろん君は俺の大切な奴だよ。」
　馨の頭を撫でながら深夜は言う
「……もう。そういうところずるいよ。」

頬を赤く染め、乙女のような顔をしている馨。
「んんっ！私がいるの忘れてませんか？」
「空気読めよー甘粕ぅー」
深夜がジト目で甘粕に文句を言い、馨は顔を真っ赤にして黙っている。
「嫌々、それを見るこっちの気持ちも考えて下さいよ深夜さん。
あと言い忘れていましたがドイツの魔術結社とはドイツにまつろわぬ神が現れた時ひ深夜さんが代わりに戦うということで話がつきました。よろしいですね？」
「まぁ良いよ。神と戦えるなら万々歳だ。」
やはり彼もカンピオーネの例に漏れず戦い好きである。
「それにあと少しで冬休みも終わるし高校生活がまた始まるなぁ」
そう、彼は今高校2年生である。しかも生徒会長。驚きである。
こんな感じの深夜であるが学校では頭脳明晰、運動神経抜群、容姿端麗と男女問わず虜にする魅惑の生徒会長として通っているのだ。
「それとドニは大丈夫なの？あの執事が連れて帰らないと行けないくらいの怪我を負ってた筈だけど。」
「サルバトーレ卿は腕が切断寸前までいっていたそうですが流石はカンピオーネ、もうくっつきそうということです。」
「そなんだ。流石俺の盟友だよ。」
ドニと深夜は盟友である。2年前初めて出会いその場で殺し合いどちらとも致命傷を負い死にかけた。元々波長が合っていたのかそれから彼らは盟友となりお前を殺すのは俺だ。他の誰にも譲らないというある意味独占欲を出して片方が殺されそうな時は必ず助けるという約束をしたのだ。

♦♦♦

それから数ヶ月が経ち深夜は高校三年生となり入学式の生徒代表挨拶を行おうとしていた

「新入生の皆さん。このたびは入学おめでとうございます。

私たち在校生一同は、皆さんの入学を心から歓迎しています。

この私立城楠学院は、歴史と伝統のある学校であるのと同時に、生徒の自主性を重んじる自由な校風を持っています。部活動以外の、自主研究、国際交流も非常にさかんに行われており、実際に学生生活を送っている私たち在校生も、最初は少し驚いたほどです。

生徒の自主的な活動に関する先生方のスタンスは、非常に柔軟であり、私たち校生の自慢でもあります。授業中は眼鏡の奥にするどい眼光を光らせている先生方も、私たちの自主的な研究活動や国際交流に関しては非常に理解を示して下さり、ふだんは決して口出しをなさいませんが、困った時には時には必ず助けて下さいます。

しかし、ただ単に何もせず、どんな活動にも参加せずに日々を過ごしていると、あっという間に時間だけが流れていってしまいます。皆さんの大切な3年間を実りあるものにするためにも、何か夢中になれるものをぜひ見つけて下さい。私たちの愛する私立城楠学院へようこそ。これから一緒に学び、一緒に思い出を沢山作りましょう。

わからないことがあれば何でも聞いて下さい。皆さんが一日も早くこの学校に慣れるよう、在校生一同、応援しています。以上を持ちまして私からの歓迎の言葉とさせて頂きます。

在校生代表白峰深夜。」

バチパチと拍手が起こる。

「素晴らしい挨拶をありがとう。彼は我が校が誇る生徒会長です。＊

校長が深夜を褒めるなか、深夜は頭の中で考えていた

あぁダルかったなぁ。興味ない奴らの前で喋るなんて苦痛なんだよ面白そうだから生徒会長とかなったけどやめてぇー。雑務とかは他の奴らがやってくれるけどあいつらに危ないことが起こったら助けてやろう。

ほんとに彼は生徒会長なんだろうか

♦♦♦

それからまた数ヶ月が経ち夏休みが始まった

「深夜さん。ドイツにまつろわぬ神が降臨しました。」

「りょーかい。行くとしようか！」